



鷹栖町に
移住したヒト 03

安田 周司 さん

埼玉県出身。30歳までは管理栄養士として専門学校で料理を指導。実家が鷹栖町だった妻の希望により、まずは札幌市に移住。5年後に鷹栖町へ引っ越して家業の農業を引き継ぐ。以来10年ほど農業に従事。鷹栖農業の未来を牽引するひとりである。

同じ師匠の下で育った3人

競い合い、助け合う同期のような存在

35歳のとき、妻の実家が営む農業を継いだ安田周司さん。帰省時に農業機械に乗せてもらったこともあり「できるのではないかと少し期待をしていた。だが、現実には甘くなかった。1年目に修業として鷹栖町内の稲華屋(米、野菜、加工品などを手がける農業法人)で研修をしたが、農業の厳しさがよくわかったという。「35歳から始めたので65歳までと考えると農業ができるのは30回しかない。これでいいのか」といつも自問自答しています。今年で11回目の農業。安田さんは「今まで一番天気が悪くて心配」と話す。1年1年が経験値の積み重ねであり、今

年の結果も最後までわからない。だが、安田さんは着々と規模を広げていて、気づけば10年で7・5町ほど耕地面積を増やすことに成功している。「今、取材受けてるから、うちにおいでよ。安田周司さんは取材開始から間もなく、電話をかけた。数十分後、作業着で駆け付けてくれたのが田浦大輔さんと森田恭平さんの2人。安田さんたち3人はほぼ同時期に就農し、以来10年間、田植えや収穫を共同で行ってきた仲間だ。農家の長男ではないことも共通点である。

田浦さんは土地や機械がない状態から農業を始めている。留萌の水産会社

で研究職として働いていた田浦さんは、将来的な水産資源の枯渇を懸念し思いきって転職。「農業を始めよう」と鷹栖町に引っ越してきた。そのとき隣に住んでいた安田さんの義父、伊林正さんに出会い、道が開けてきたのだとか。ビニールハウスで2年間の研修を経て、本格的に就農を果たす。田浦さんと伊林さんにはこんなエピソードがある。強風が吹いたある日、心配になった田浦さんはビニールハウスを見に行き、飛ばされそうになっているハウスを目

撃。田浦さんが体で抑えようとしたところ、伊林さんが慌てて飛んできたという。ハウスが心配なあまり、自分のことを顧みずに行動してしまった田浦さん。「自然には勝てないんだから」と伊林さんに諭されたという。森田さんは元々、屋根や板金の仕事をしていたが、妻の実家が農家で、高齢の義父母に代わって農業をすることに。「新しく買った機械のことがわからなくて。義父に聞いたら『近所に同じ機械持つてる人いるぞ』と言われ、

教えてはもらえなかった」。後継者には直接指導しながらない。「農家の親父あるある」だ。背中を見て技を盗めというスタイルの農家は多い。その近所の同じ機械を持つ人が安田さんの義父の伊林さんだったというわけだ。「身近な聞きやすい人に質問するんじゃない」。3人の師匠である伊林さんの口癖だ。伊林さんが意図するのは、人脈ゼロの3人に鷹栖でのつながりを作ってほしいということ。彼らは自然と他の農家に聞いたり、普及センター

に出向いたりして工夫をするようになる。そうすると地域の中で認識され、知り合いも増えていった。「伊林さんは人一倍俺らのことを思ってくれていますね」と田浦さん。先を見据えた伊林さんの判断が3人の成長を加速させたのだらう。伊林さんという師匠の下、絆を深めてきた3人。安田さんは「仲間よりも上の関係。他の人に頼めないことも、2人には頼める」と信頼を寄せる。競い合いながら、手を取り合うナイスな関係だった。



安田さんと田浦さんは2017年にグローバルGAP(農業生産工程管理で国際標準)を取得。東京オリンピックを見据えて、鷹栖から世界に羽ばたこうとしている。

